

ISBN 978-4-903875-23-1

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 20

ユーラシア諸言語の多様性と動態－20号記念号－

ユーラシア言語研究コンソーシアム 2018年3月発行

Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume

The Consortium for the Studies of Eurasian Languages

シベ語におけるテンスとモダリティ
－特に「過去」のテンス性について－

Tense and Modality in Sibe: focusing on the temporality of past

児倉徳和

KOGURA, Norikazu

シベ語におけるテンスとモダリティ —特に「過去」のテンス性について—¹

児倉 徳和

【キーワード】シベ語 テンス テンス性 知識 活性化

1. はじめに

本論文では、シベ語²のこれまでの研究においてテンスとして記述されてきた要素の意味機能をモダリティとして分析しなおすことを通し、シベ語におけるテンスとモダリティの関わりについて論じる。そして、結論として先行研究が一部の文法的要素についてテンスとして記述している意味機能の一部は、現象の記述としては妥当であるものの、これらの要素は本質的にはテンスではなくモダリティを表し、先行研究の記述している意味特徴はモダリティから二次的に生じる時間的特徴(テンス性)である、ということを主張する。

本論でもふれるように、李ほか(1986)をはじめとしたこれまでのシベ語の記述がシベ語に過去と非過去(現在・未来)というテンスの対立を認めてきたのに

¹ 本論文は2017年3月30日に京都大学ユーラシア文化研究センター(羽田記念館)で開催された「2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会『ユーラシア言語研究 最新の報告』」での発表の一部が基になっている。著者は学部生の時分よりユーラシア言語研究コンソーシアム、およびその前身となる科研費プロジェクトの活動に参加し、研究発表や論文執筆を通して故庄垣内正弘先生をはじめとする会員の先生方のご指導を頂く機会を得たことが現在の研究の土台になっている。ここにコンソーシアムの礎を築かれた故庄垣内正弘先生の生前のご指導に感謝申し上げますと共に、その学恩に報いるべく本論文を捧げます。また、本論文の執筆にあたり査読者の方には大変貴重なコメントを頂いた。ここに併せて感謝申し上げます。

² シベ語は中国・新疆ウイグル自治区チャブチャルシベ自治県(察布查爾錫伯自治県)およびイーニン市(伊寧市)を中心に話される満洲=ツングース諸語の一つである。本論におけるシベ語のデータは1943年生、チャブチャルシベ自治県第4ニル(第4郷)出身の話者に対する調査により得られたものである。著者の調査への献身的なご協力に対し、この場をお借りして感謝申し上げます。

本論におけるシベ語の表記は特に言及のない限り Kubo(2008) および久保ほか(2011)に倣い以下の音素表記を用いる：子音/p, t, c, k, q, b, d, j, g, ɠ, f, s, š, x, ɣ, ž, m, n, ŋ, N, r, w, y, l/, 母音/a, e, i, o, u/. /X/はそれぞれ/x/と/ɣ/の対立が中和した原音素を表す。また、/ʔ/は有標のアクセントを表す。#は漢語要素の音節境界を表す。略号一覧は本論の末尾に附す。

対し、著者は児倉 (2010, 2013b) において、シベ語に文法的なテンスの対立は存在しないとしている。本論文は後者の立場から、前者の諸研究におけるテンス、特に過去のテンスに関する記述について再検討を行うものである。

2. 文法的テンスをめぐる問題

2.1 テンス

まず本論文での議論に先立ち、テンスの定義、特にある言語における文法的テンスの有無をどのように判断するかについて先行研究をもとに論じる。まずテンスの定義として、本論文では Comrie (1985:9) による “[T]ense is grammaticalised expression of location in time (文法形式によって表される事態の時間的位置)” を採用する。Comrie (1985:9) は時間を現在という点を境に過去と未来に分断された直線 (時間軸) として概念化しているが、テンスはこの直線上の位置を表すと定義される。Comrie (1985:9) の定義によれば、英語における動詞の現在形・過去形・未来形はテンスにより区別され、テンスが動詞の屈折形式として文法的に標示されていることになる。Comrie (1985) はさらに、テンスに (主に) 動詞の屈折という文法的要素により表される文法的なテンスと、日本語における「今」、「昨日」のような語彙的要素により表される語彙的なテンスの区別を認めている。また英語の動詞の屈折変化の場合にも見られるように、テンス、特に文法的なテンスは発話時を基準とした相対的な位置関係として表されるというダイクティックな特徴をもつ。

2.2 テンスと事態の現実性 (actuality)

今見たように、テンスは事態の時間的位置を標示する範疇であるとされるが、テンスはさらに事態が時間軸上に位置付けられるか否か、時間軸上に位置を持つか否かという区別とも密接に繋がっている。例えば Givón (2001) は以下のように習慣 (habitual) の一般的なテンス体系における特異性と、モダリティとの親和性を指摘している。

“Habitual expressions are not about any particular event, thus not about any particular event-time, thus lacking a crucial ingredient of tense. [...] Further, the habitual also has a healthy interaction with the irrealis modality. So that individual languages may lump it together as either a sub-category of the imperfective or of irrealis.” (Givón 2001:286)

このように、特定の時間的位置と結びつけられる特定の事態であるか否かということは事態を現実 (realis) のものとして認識するか、非現実 (irrealis) のものとして認識するか、というモダリティと結びつきやすいことが分かる。また Mithun (1999) は現実・非現実というモダリティについて、事態の現実性と、そ

れに伴う認識上の特徴の両面から以下のように述べている。

“The realis portrays situations as actualized, as having occurred or actually occurring, knowable through direct perception. The irrealis portrays situations as purely within the realm of thought, knowable only through imagination.” (Mithun 1999:173)

このように、事態が現実のものであるか否かという問題は一方で事態が時間軸上に位置付けられるか否かというテンスの問題として捉えられ、一方では事態を現実のものとして認識するか否かというモダリティの問題として捉えられる。本論文では、このような事態の現実世界における実在性に関する意味範疇としてテンスとモダリティとは独立に現実性 (actuality) という範疇を考える。例えば、習慣 (habitual) や法則は現実世界において特定の時点において生じた (あるいは生起しうる) 特定の事態でない、という点で非現実 (non-actual) の事態であると考え。また、未来の事態は個別具体的であっても、発話の時点では非現実の事態であると考え。

現実性は、テンスとムードの境界に位置付けられる概念である。テンスの側から見ると、時間軸上に位置付けられない、という特殊な要素であるといえ、ムードの側から見ると、非現実の事態を表す、という点ではムード的であると言えるが、話し手の認識や態度ではなく、事態の側の特性を表している点で典型的なモダリティとは言えない³。

2.3 文法的テンスの有無

次に問題となるのは、ある言語が文法範疇としてのテンスを持つか否かをどのように判断するか、という点である。Comrie (1985) によるテンスの定義に従えば、文法的なテンスとは、本来的に時間的位置を表す文法的形式によって表される事態の時間的位置であり、文法的なテンスを持つ言語とは、このような文法的形式を持つ言語を指すと考えられる。Comrie (1985) は文法的テンスを持たない言語の例として中国語とビルマ語の例を挙げており、中国語は、動詞が特定の文法形式をとることなく、過去・現在・未来の事態全てを表すことが可能であり、事態の時間的位置は専ら語彙的要素により表されることから、文法的なテンスを持たず、また、ビルマ語は、文末詞という形で文法的要素が存在し

³ モダリティについて、Palmer (1986) や Narrog (2005, 2012) によって事実性 (factuality) という概念が提案されているが、事実性は事態の特性のみでなく、話し手の認識についても言及する概念である。Mithun (1999) にもあるように事態が現実のものか否かという現実性は話し手の認識と切り離すことはできないが、本論では主に事態の特性に言及する概念として現実性という用語を用いる。

ているものの、それが表すものが事態の時間的位置ではなく、事態が現実のものであるか否かという現実性を表すために文法的なテンスを持たないとしている。

中国語の場合、動詞は特定の文法形式をとらないため、テンスの文法範疇が存在しないという論は妥当であるといえるものの、ビルマ語の場合は動詞が文法形式をとるため、テンスの文法範疇を認めるか否かは文法要素の意味の分析に拠ることになる。つまり、文末詞の意味を未来—非未来と分析するか、非現実—現実と分析するかにより文法的なテンスを持つか否かが決まる、ということである⁴。文法的テンスは、事態の時間的位置が文法的要素の本来的な機能により表される場合に存在すると認められるが、特にビルマ語の場合を考えると、文法的なテンスの有無という議論は、単にその有無を二元論的に論じるよりも、むしろある言語における時間ダイクシス (temporal deixis) がどのように文法的に表されるか、という議論が有効であると考えられる⁵。

2.4 テンスとテンス性 (temporality)

時間ダイクシスの文法的要素への現れからテンスを検討する際には、今見たビルマ語の例のように、ある文法的要素について観察される時間的な意味特徴が当該の要素が本来的に表す意味であるか、あるいは本来的にはモダリティやその他の語用論的な意味機能をもつ要素から二次的に生じた意味か、という議論が必要である。ビルマ語の場合でいえば、文末詞の本来的な意味が非現実・現実という事態の事実性であるとする、未来・非未来という時間の特徴は事実性から生じる二次的特徴である、ということになる。本論文では、文法的要素が本来的に表す時間的な意味特徴をテンスとし、これに対し本来的には他の意味を表す文法的要素から二次的に生じる時間的な意味特徴をテンス性 (temporality) と呼んで区別する。

本論文で問題とするのは、過去のテンス性とモダリティの結びつきである。本論文では、先行研究によりテンスを表すと記述されてきたシベ語の文法的要素の少なくとも一部について、これらの要素が本来的にはモダリティを表し、これらの要素について観察される時間的な特徴はモダリティから二次的に生じるテンス性であるとした上で、ある要素のモダリティ的特徴からテンス性が生じるメカニズムを論じる。

⁴ Mathias and San San Hnin Tun (2016: 371-377) では問題となる要素 *-te/-de* と *-me* の意味がそれぞれ *non-future/realis* と *future/irrealis* というようにテンスとモダリティの両面から記述されている。

⁵ 文法的テンスの認定基準を厳格に適用していくと、Comrie (1985) 自身も認めるように、文法的なテンスを持つとされる英語においても、文法的なテンスが存在しないという分析が可能になり、文法的なテンスを持つ言語が限定されすぎるといえる問題が存在する。

3. モダリティの枠組み

3.1 モダリティ

モダリティは、Palmer (2001) によれば文の命題的内容に対する話し手の判断と態度を表す意味範疇であるが、どのような要素をモダリティの枠組みに含めるか、またモダリティの内部構造をどのように捉えるか、という問題については議論が存在する⁶。そのような議論をもとにモダリティの体系全体を論じることが本論文の趣旨ではないため、ここでは本論文での議論に直接的に関係する範囲でモダリティの枠組みを整理しておく。

本論文では、モダリティに関係する要素として大きく事態の現実性 (actuality) と、話し手による事態の認識性 (epistemicity) の二つを認める。現実性は既に 2.2 で見たため、以下では、主に認識性について整理する。

3.2 認識性 (epistemicity)

認識性とは、話し手の持つ知識に対する文の命題的内容のステータスに関わる範疇である。Palmer (1986, 2001) をはじめ、モダリティの研究では、モダリティを大きく認識的モダリティ (epistemic modality) と束縛的モダリティ (deontic modality) に二分するものが多いが、ここでの認識性はこれらのうちの認識的モダリティに相当する⁷。

認識的モダリティはこれまでのモダリティ研究の枠組みにおいて、命題の現実世界における事実性に関する話し手の確信 (commitment) や断定 (assertion) の強さといった要素から論じられているが、本論文では、認識的モダリティを話し手の心内で生起する情報・知識の処理のプロセスと関連させて捉える。言語形式の意味機能をこのようなプロセスとの関連から論じるアプローチは、Chafe (1973, 1987, 1994), Lambrecht (1994⁸), 田窪 (1995[2010]), Takubo and Kinsui

⁶ Palmer (1986), Narrog (2005, 2012) はそれまでに提案された様々なモダリティの定義を踏まえ、モダリティの定義とカテゴリの低位分類を行っている。特に Narrog (2005, 2012) は、話し手の判断 (judgement) ないし態度 (attitude) を表すという定義と、命題の事実性 (factuality) という定義を取り上げ、前者の定義は広すぎて定義として機能しないため、後者の定義をとることを主張している。

⁷ Palmer (1986) は自身の認識的モダリティの定義について、“This use of the term may be wider than usual, but it seems completely justified etymologically since it is derived from the Greek word meaning ‘understanding’ or ‘knowledge’ (rather than ‘belief’), and so is to be interpreted as showing the status of the speaker’s understanding or knowledge” というように、認識的モダリティを話し手の理解と知識ステータスであると明示的に述べている。

⁸本論では、Lambrecht (1994) と同様、心内の情報の活性化 (activation) という心的プロセスを仮定し、これが談話における旧情報 (old information) と結びついていると考えるが、本論でいう旧情報 (old information) は Lambrecht (1994) のものとは異なる。Lambrecht (1994) によれば、旧情報とは「会話において聞き手が既に知っている」と話し手が推測する情報であるのに対し、本論では「談話の新情報を心的に処理するのに必要な、前提となる知識」であり、話し手は知っているが、聞き手は知らない情報であると考え。つまり、聞き手

(1997), 田窪・金水 (1996, 1997), 定延・田窪 (1995), 齊藤 (2006), 富樫 (2001) など数多くの研究に見られる⁹。

言語形式の意味機能を話し手の心内で生起するプロセスとして記述するアプローチを取る際には、言語主体の心内で生起する情報・知識の操作の種類と全体のプロセスについて適切な仮定を行う必要がある。本論文では、記憶領域への情報の登録と読み出し (活性化), および新規の情報と知識領域に既存の知識の照合, という2つのプロセスを仮定する。

3.2.1 記憶領域への情報の登録とその活性化

言語形式と言語主体の記憶の関係について論じたものとして Chafe (1973) が存在する。Chafe (1973) は記憶に表層的記憶 (surface memory), 浅層的記憶 (shallow memory), 深層的記憶 (deep memory) という区別を設け, 話し手の獲得した情報はまず表層的記憶として記憶に取り込まれ, その後時間の経過とともに浅層的記憶, 深層的記憶へと移行していくとしている。Chafe (1973) はここでいう表層的記憶, 浅層的記憶, 深層的記憶を記憶の内部に存在する領域ではなく, 情報の活性化状態に基づく分類であるとしている。また, 外部からの出来事の情報, は, 当初は活性化された状態であるが, 時間の経過とともに活性を失い, やがて不活性の状態となるとしている。さらに Chafe (1973) によれば, これらの記憶は発話に伴い活性化 (activation) を受けるが, 既に活性化されている知識と不活性の知識は活性化のコストが異なるとしている。英語の場合, この違いは出来事に関する情報は活性ならば時間を表す要素なしで言語化が可能であるのに対し, 活性でない知識を言語化する際に時間副詞句が必須となり, 最も不活性の記憶は時間副詞を文頭におく必要がある, というような統語的差異として現れる。Chafe (1987, 1994) では, 知識の活性化状態は活性 (active), 半活性 (semi-active), 不活性 (inactive) の三者に区別されるようになる。

活性/不活性という知識の状態の区別と, 知識の活性化という心的プロセスは, 田窪・金水 (1997) や富樫 (2001), 齊藤 (2006) などの論考でも仮定されている。これらの論考は心内に知識領域という心的領域を仮定し, さらに知識領域の内部に長期記憶が記録される知識データベースと, 活性化された情報・知識が記録されるバッファの二つの領域を仮定している¹⁰。さらに Lambrecht

の知識に対する想定が Lambrecht (1994) とは異なっている。

⁹ 例えば田窪 (1994) は日本語について「感動詞類, 終助詞類, 陳述副詞, 接続副詞といった語類の機能を心的なデータ管理操作のモニタ標識と見ることにより, これらの言語形式を対話による記憶データベース更新の計算操作と関連させて位置づけることが可能になり, どのような機能を果たしているのかを明確にすることができる。」と述べている。

¹⁰ 富樫 (2001) は知識データベースとバッファをそれぞれ Chafe (1987, 1994) における半活性 (semi-active) の情報・知識と活性 (active) の情報・知識が登録されている領域というように, Chafe による活性化状態の枠組みと知識データベース, バッファという領域を設定

(1994) は文内でプロミネンスが置かれる要素について情報構造 (information structure) との関係から論じているが、分析の枠組みの中で知識の活性化状態 (activation state) の区別と知識の活性化 (activation) という心的プロセスを認めている。

3.2.2 情報の照合

Chafe はさらに、Chafe (1986) において証拠性 (evidentiality) との関連から外部から獲得された情報が心内で受ける処理の枠組みを論じている。証拠性とは、Aikhenvald (2004) によれば情報の出所を表す文法範疇であるが、Chafe (1986) は証拠性に情報の来源の他に、さらに情報の獲得に用いた推論の区別、情報に対する言語主体の確信の度合いや他の知識や言語形式といった要素も含め、情報に対する認知的立場を表す範疇であると定義している。

Chafe (1986) による証拠性の定義は、証拠性の要素として文の内容と既存の知識との矛盾の有無、つまり文の内容が話し手の予測どおりであるか否かの区別を認めており、これは文の内容と既存の知識との照合という心的プロセスを認めていると考えられる。

この他、DeLancey (1997, 2001) も多くの言語において発見 (mirativity), つまり話し手の予想外の気持ちを表す文法的要素が存在することを指摘しているほか、富樫 (2001) も情報の獲得に伴い現れる感動詞「あっ、えっ、おっ」について、バッファに存在する情報と新規獲得情報の一致率、という概念を用いて分析を行っている。これらの論考においても、Chafe (1986) の証拠性の枠組みにおける文の内容と既存の知識の照合という心的プロセスの存在が仮定されているといえる。

3.2.3 情報・知識の心的処理のモデル

以上のように、言語形式の意味を言語主体の心内で行われる情報・知識の処理操作とのかかわりから論じる枠組みでは、知識が記録される心的領域が存在すること、心的領域に存在する知識に活性または不活性という状態の区別が存在し、不活性の知識を活性化する心的プロセスが存在すること、また外界の情報 は知識領域に取り込まれる際に既存の知識との照合を受ける、という心的プロセスが仮定されてきた。

これらの心的プロセスを体系化し、新規情報の登録のモデル化を行った研究として齊藤 (2006) が存在する。齊藤 (2006) は日本語において証拠推量を表す助動詞「ようだ」と「らしい」の意味を情報・知識の心的処理との関連から論じたものであるが、知識領域の中に知識が登録される知識データベースと情報

する枠組みの間の対応関係を示唆している。

や知識が処理のために一時的におかれるバッファという 2 つの領域を仮定し¹¹、さらに以下の (1) に示した情報の取り込みのプロセスを仮定している。

- (1) 齊藤 (2006) の仮定する知識データベースへの新規情報の登録のプロセス
- ① 文の表す命題がバッファに書き込まれる。
 - ② 文の話し手が情報源として但し書き部¹²に入る。
 - ③ 文の表す命題と関連する既存の命題が知識データベースからバッファに読み出される。
 - ④ バッファ内の命題が矛盾をきたさないかチェックされる。
 - ⑤ 矛盾が見つかったら、矛盾の解消が図られる。
 - ⑥ 矛盾がなければ、命題が知識データベースに書き込まれる。

以上、本節では、本論文の議論に必要な範囲でモダリティに関する先行研究を整理した。本論では、特に 3.2 で取り上げた先行研究に従い、言語形式の意味機能を話し手の心内で生起する情報・知識の処理のプロセスと関連させて論じる。本論では、齊藤 (2006) に倣い、知識領域に知識データベースとバッファの二つの領域が存在すると仮定する。また、Chafe (1973) が仮定する活性化が、(1) に掲げた齊藤 (2006) により仮定されるプロセスの中の知識データベースからバッファへの知識の読み出しに相当すると仮定する。また、Chafe (1986)、齊藤 (2006) に倣い新規の情報と既存の情報の照合という心的操作も仮定し、新規情報の登録に関わる心的プロセスとして 齊藤 (2006) による (1) を仮定し、議論を行う。

4. シベ語におけるテンス

4.1 先行研究によるテンス・アスペクト体系

まず、先行研究の提示するテンス・アスペクト体系、特にテンスの対立について検討する。シベ語のテンス・アスペクト体系について体系的に論じた代表的な論考としてまず李ほか (1986) のものが存在する。以下の表 1 は李ほか (1986)

¹¹ 先に述べたように、Chafe (1973) は表層的記憶、浅層的記憶、深層的記憶を記憶領域内の領域の区別ではなく、個々の知識の活性化の状態 (activation state) の違いとしていることから、ここで述べる知識データベースとバッファといった 2 つの「領域」が存在するとは考えていないと考えられるが、本論では知識データベースとバッファという領域を認めることはあくまでモダリティを記述するための言語学的な仮定として妥当であるとする。

¹² 齊藤 (2006) では、但し書き部には文の話し手以外に「直接経験」、「推論」といった、情報の来源が書き込まれているとされている。これは Aikhenvald (2004) や Chafe (1986) で情報の来源として扱われているものに相当すると考えられる。

によるテンス・アスペクトの体系を示したものである¹³。李ほか (1986) によれば、シベ語のテンス・アスペクト体系は、現在—将来時の *-mi*、現在進行時の *-maɣei*, *-maɣeŋe*, *-maɣe*、過去時の *-Xe*, *-Xeŋe*, *-Xe* という接辞と、これに補助動詞 *bi-* (ある・いる) の過去形 *biXe*, *biXe*、あるいは補助動詞 *o-* の過去形 *oXe* が後続した形式からなるとされている。

表1 李ほか (1986) によるシベ語のテンス・アスペクトの体系¹⁴

時	体	進行	未完成	完成
過去	<i>-Xe</i> <i>-Xeŋe</i> <i>-Xe</i>	<i>-maɣe+biXe</i> <i>-maɣe+biXe</i>	<i>-me¹⁵+biXe</i> <i>-me+biXe</i>	<i>-Xe+biXe</i> <i>-Xe+biXe</i>
現在—将来	<i>-mi</i>	<i>-maɣei</i> <i>-maɣeŋe</i> <i>-maɣe</i>	<i>-me+oXe</i>	

李ほか (1986) の具体的な記述は以下のようにまとめられる。まず、*-mi* は「現在—将来時」を表し、「現在将来時は行為が発話時に発生するか、または言及した後に発生することを表す。前者か後者か、というのは前後の文から自動的に特定される。そのほか、経常的な行為も現在—将来時で表される。」と述べている (李ほか 1986:82, 原文は中国語, 訳は筆者による。以下同様)。次に、*-maɣei* を「現在進行時」を表すとし、「現在進行時は行為が発話時において進行中であることを表す。」と述べている (李ほか 1986:78)。

また、李ほか (1986:76-78) では *-Xe*, *-Xeŋe*, *-Xe* がいずれも「過去」を表し、三つの形式の差異は遠い過去か近い過去か、というテンス性¹⁶ と、話し手

¹³李ほか (1986) はテンス・アスペクト体系を表の形式では提示していないため、表1は李ほか (1984) による表を基に、李ほか (1986) で新たに分析の対象となった形式を李ほか (1986) の記述に従い書き加えて作成している。なお、後で述べるように、児倉 (2013b) では過去の *-Xe* と *-Xeŋe* をそれぞれ *-Xe=i*, *-Xe=ŋe* と分析し、*-Xe* がテンス・アスペクトを表す接辞、*=i* と *=ŋe* がモダリティを表す接語であるとしている。また、進行の *-maɣei* と *-maɣeŋe* も過去の要素と同様に、テンス・アスペクトを表す *-maɣe* とモダリティを表す接語からなる *-maɣe=i* と *-maɣe=ŋe* と分析し、また補助動詞の過去形 *biXe* と *biXe*, *oXe* も *Xei* の部分をそれぞれテンス・アスペクトを表す *-Xe* とモダリティを表す接語からなる *bi-Xe=i*, *bi-Xe*, *o-Xe=i* に分析している。

¹⁴表1の表記、および本文中の李ほか (1986) の引用に現れるシベ語の表記は李ほか (1984, 1986) の表記を著者のものに改めてある。

¹⁵ *-me* は同時に行われる行為や行為の様態、行為の目的を表す副動詞 (converb) であるが、補助動詞が後続する場合には、現在—将来の *-mi* に対応するテンス・アスペクトの意味を表す。

¹⁶ 李ほか (1986) の記述は三者の時間的特徴を記述しているが、李ほか (1984) の表では同

が事態を直接経験したか否かという証拠性 (evidentiality) によるとしている。そして、-Xe については「話し手が発話するその時に、動作や行為が発生したばかりで、過去のものになったばかりのものであることを表す」、-Xeŋe については、「話し手が発話するその時に、動作と行為が既に実現し、過去のものとなったことを表す。-Xe と比べると、実現した時間と過去のものとなった時間がやや長く、また動作は現在まで継続していない。」、-Xei については「話し手が発話するその時に、動作・行為が既に実現し、過去のものとなったことを表す。-Xe と比べると、動作が実現した時間と過去のものとなった時間がやや長く、-Xeŋe と比べると、やや短い。」と述べている。

李ほか (1986:80) はまた、動詞に補助動詞 biXe*i* と biXe が後続して構成される過去進行相、過去未完成相、過去完成相についてもそれぞれ、「話し手による発話のその時以前に進行中であった動作や行為を表し」、「話し手による発話のその時以前に動作や行為が既に発生したが、完成したとは限らないことを表し」、「話し手による発話のその時以前に動作や行為が既に完成、終結したことを表し」というように共通して発話時以前の動作・行為を表すとしている。

これらの記述を特にテンスに注目してまとめると、李ほか (1986) は大きく過去と現在・未来 (非過去) というテンスの対立を認めていると考えられる。

この他、張 (2008) や薩蒙ほか (2011)¹⁷ も過去—非過去 (現在—将来) というテンスを認め、特に張 (2008) は -mi に相当する形式を現在—未来 (の非完成相)、-Xe*i* に相当する形式を過去 (の完成相) と記述している。-maŋe*i* は進行相であるとしているが、テンスについては記述がない。また、Zikmundová (2013) は過去—完成相—特定時 (definite time) と非過去—非完成相—不特定時 (indefinite time) というテンス・アスペクトの複合による対立を設定し、-mi に対応する形式を、現在・過去・未来をいずれも表すことが可能な不特定時・非完成相 (imperfective) としている。また、-maŋe*i* と -Xe*i* をそれぞれ進行相 (progressive)、完成相 (perfective) としている。

4.2 先行研究によるテンス・アスペクト体系の検討

ここで先行研究によるテンス・アスペクト体系を李ほか (1986) の記述を中心に、また過去と現在—未来 (非過去) というテンスの対立を中心に検討する。

4.2.1 非過去を表す要素が発話時以前の事態を表す場合

李ほか (1986) でそれぞれ現在—将来時と現在進行時と記述されている -mi と -maŋe*i* について、児倉 (2010, 2013b) は、少なくとも -mi と -maŋe*i* が過去の習

一のコラムに入れられていることから、李ほか (1984) は三者は共通して過去、というテンスを表し、それ以上の時間的特徴は文法的対立とは考えていないと考えられる。

¹⁷ 薩蒙ほか (2011) は李ほか (1986) の分析をほぼ忠実に踏襲している。

慣ないし出来事を表すことができる事例を挙げている。まず、*-maxei* はすでに示したように、発話時点で完結していない (進行中の) 出来事を表すが、以下の (2) のように、過去のある時点において完結していない (発話時点では完結している) 出来事を表すことも可能である。

(2) *bi* *yaciN* *mame'i* *puse=de* *gene-Xe=ŋe*,
1SG 黒 おばあさん=GEN 店=DAT 行く-PFV=OINF

yaciN *mame'* *jeŋe* *jiŋa* *tolu-maxei=i*.
黒 おばあさん ちょうどお金 数える-IMPV=NINF

＜わたしが“黒いおばあさん”の店に行ったら、黒いおばあさんはちょうどお金を数えていた＞

(2) の例では、「黒いおばあさんがお金を数える」という事態が発話時より前に生起しているにもかかわらず、*-maxei* が用いられている。このとき、コンサルタントによれば発話時において数えているか否かは問題にならないという。

さらに、李ほか (1986) において現在・未来を表すとされている *-mi* は主語の発話時における習慣を表すだけでなく、以下の (3) のように発話時には維持されていない過去の習慣を表すことも可能である。

(3) a. *tere* *yeneŋedari'* *feksi-me* *uru-we-mi*.
3SG 毎日 走る-CVB 練習する-VOICE-IRR.NINF

＜彼は毎日ジョギングをしている＞

 b. *tere* *daci'* *yeneŋedari'* *feksi-me* *uru-we-mi*.
3SG 昔 毎日 走る-CVB 練習する-VOICE-IRR.NINF

＜彼は昔毎日ジョギングをしていた＞

このように、李ほか (1986) において非過去 (現在—未来) を表すとされている要素の少なくとも一部は過去の事態も表すことが可能であり、特に *-mi* は過去・現在・未来の事態すべてを表すことが可能である。

4.2.2 過去を表す要素が発話時の事態を表す場合

4.2.1 では、李ほか (1986) の記述において現在—未来のテンスを表すとされている要素が過去も表す場合がある、ということを見たが、さらにこれとは反対に、李ほか (1986) において過去を表すとされている要素が発話時に生起した事態を表す場合も存在する。*biXe* は李ほか (1986) では過去を表し、前に現れる動詞の形式により、完成・未完成・進行のアスペクトが表される、と記述されているが、以下の (4), (5) のように発話現場で生起した事態も表すことが可能であ

る。

- (4) (話し手は「彼」が酒を飲んだのに気付いた)

oi, tere ayrke aymi-Xe bi-Xe=i.
INTJ 3SG 酒 飲む-PFV AUX-PFV=NINF

<あっ、彼、酒を飲んでいるんだ>

- (5) (話し手が今日は家に来ないと思っていた)

si ji-Xe bi-Xe=i na.
2SG 来る-PFV AUX-PFV=NINF Q

<お前、来たのか>

この例では、主語の動作時が話し手の発話時 (=話し手が事態を発見した時点) より前であることから、文が過去 (発話時より前) に生じた事態を表すという李ほか (1986) の記述は妥当である。しかし、biXe*i* は特に非完了相に後続する場合、以下の (6), (7) のように、発話時に進行中の事態も表すことが可能である。

- (6) (話し手が部屋のカーテンを開けると、窓の外は雨が降っていた)

oi, aya da-maye bi-Xe=i.
INTJ 雨 降る-IMPFV AUX-PFV=NINF

<あっ、雨が降っている>

- (7) (話し手は目の前の男の子がシベ語を話せるのに気づいた)

ere xayexi siwe' gisuN bayane-me bi-Xe=i.
これ 男子 シベ 言語 できる-CVB AUX-PFV=NINF

<この男の子はシベ語が話せる>

(6) では、文の表す、雨が降るという事態が発話時において進行中であるにもかかわらず biXe*i* が用いられている。また、(7) では、主語のシベ語を話す能力は発話時において保持されているにもかかわらず、biXe*i* が用いられている。この例から、biXe*i* は特に動詞の未完結相に後続する場合、過去の事態を表すとは必ずしも言えないことが分かる。

4.3 兎倉 (2010, 2013b) によるテンス・アスペクト・ムード体系

4.2 でみたように、李ほか (1986) の分析に従うと、現在-未来 (非過去) を表す要素が過去も表したり、過去を表す要素が現在も表すことになるため、李ほか (1986) の提案するテンス・アスペクト体系は見直す必要がある。兎倉 (2013b) は、李ほか (1986) の体系を整理し、まず過去の -Xe=i, -Xe=ne, -Xe の対立、お

よび補助動詞の $bi-Xe=i$, $bi-Xe$, $o-Xe=i$ をモダリティを表す要素としてテンス・アスペクト体系から切り離し¹⁸, $-Xe$, $-ma\chi e$, $-re$ ¹⁹ ²⁰のみがテンス・アスペクトを表す要素であると論じた。そして, $-Xe$, $-ma\chi e$, $-re$ について事態の現実性とアスペクトによる体系を提案した。表 1 に掲げた李ほか (1986) の体系は, 児倉 (2013b) では以下の表 2a, b のようにまとめられる。まず, 表 2a のように, 李ほか (1986) において過去のテンスの 3 つの形式とされている $-Xe=i$, $-Xe=\eta e$, $-Xe$ のうち, 特に $-Xe=i$ と $-Xe=\eta e$ はテンス・アスペクト接辞とモダリティ接語に分析される。李ほか (1986) において現在のテンスを表す $-ma\chi e i$, $-ma\chi e \eta e$, $-ma\chi e$, 非過去のテンスを表す $-mi$ も同様にテンス・アスペクト接辞とモダリティ接語に分析される。李ほか (1986) は非過去のテンスとして $-mi$ のみ取り上げているが, 児倉 (2013b) では, $-mi$ に対応する形式として $-re=\eta e$ と $-re$ を掲げている。

表 2a テンス・アスペクトの動詞接辞とモダリティ接語の組み合わせ

		=i	= ηe	なし
現実 realis	完了 perfective -Xe	-Xe=i	-Xe= ηe	-Xe
	非完了 imperfective -ma χe	-ma χe =i	-ma χe = ηe	-ma χe
非現実 irrealis -re		-mi	-re= ηe	-re

¹⁸ 児倉 (2013a, 2013b) では, $-Xe$, $-Xe=\eta e$, $-Xe=i$ の対立, および補助動詞の $bi-Xe=i$, $bi-Xe$, $o-Xe=i$ の本来的な意味がテンスではなくモダリティであるという根拠として, $-Xe$, $-Xe=\eta e$, $-Xe=i$ の統語的特徴, 韻律的特徴がテンスからでは統一的に説明できず, モダリティとして分析することによりはじめて統一的に説明できることを挙げている。

¹⁹ $-Xe i$ が $-Xe=i$ と分析されるのに並行して, $-ma\chi e i$ も $-ma\chi e=i$ と分析される。また $-mi$ は共時的には $=i$ が融合しているものの, 機能的には $-Xe=i$, $-ma\chi e=i$ に対応する形式と分析される。この分析に従えば $-mi$, $-ma\chi e=i$, $-Xe=i$ はいずれもモダリティの要素を含むことになるが, 共時的には $-mi$ から $=i$ を分析できないこと, またこれら三つの形式が文の述部において最も高頻度で現れる形式であることから, 児倉 (2010, 2013b) では $-mi$, $-ma\chi e=i$, $-Xe=i$ の 3 つの形式をもとにテンス・アスペクトの分析を行っている。

²⁰ $-re$ は完了の $-Xe$, 未完了の $-ma\chi e$ に対応する非現実の形式であるが, ここで問題となるのは完了と未完了の形式はテンス・アスペクト接辞がモダリティ接語 $=i$ をとらない形式であるのに対し, $-re$ は $-mi$ とそのような形態論的關係にないということである。この問題に対し, 本論では, $-re$, $-Xe$ と $-ma\chi e$ が共通して連体修飾に用いられる, という機能的な共通性をもとに $-re$ を $-Xe$ と $-ma\chi e$ に対応する形式であると考えられる。なお, $-re$ と $-mi$ の間には共時的にはモダリティ接語 $=i$ の有無という形態論的關係が見られないが, 通時的には, $-mi$ に相当する形式は $-re$ に相当する形式と $=i$ に相当する形式に分析可能であったと考えられる (Kogura 2015)。

表 1 において動詞のテンス・アスペクト形式に後続する補助動詞 *biXe*, *biXe*, *oXe* は以下の表 2b のように、補助動詞語幹と完了接辞 *-Xe*, およびモダリティ接語に分析される。なお、本論の範囲では補助動詞語幹はテンス・アスペクト接辞として完了の *-Xe* のみとるため、表 2b では補助動詞の完了形とモダリティ接語の組み合わせとして分析している。

表 2b 補助動詞 *bi-* (*bi-Xe*), *o-* (*o-Xe*) とモダリティ接語の組み合わせ

	=i	=ŋe	なし
補助動詞 <i>bi-</i> 完了 (<i>bi-Xe</i>) ²¹	<i>-Xe/-maɣe/-me</i> <i>bi-Xe=i</i>	<i>-Xe/-maɣe/-me</i> <i>bi-Xe=ŋe</i>	<i>-Xe/-maɣe/-me</i> <i>bi-Xe</i>
補助動詞 <i>o-</i> 完了 (<i>o-Xe</i>)	<i>-me o-Xe=i</i>		<i>-me o-Xe</i>

児倉 (2010, 2013b) では表 2a に示したとおり、まず現実 *actual*/非現実 *non-actual* (児倉 2010, 2013b ではそれぞれ *realis/irrealis*) という現実性 (*actuality*) により *-Xe*, *-maɣe* と *-mi* が区別され、さらに現実の事態を表す *-Xe* と *-maɣe* が完了 *perfective*/非完了 *imperfective* というアスペクトにより区別されるとした。また、完了形の *-Xe*, *-Xe=ŋe*, *-Xe=i* の対立はモダリティによるものであり、さらに表 2b のように補助動詞 *bi-*, *o-* は専らモダリティを表す形式である。

このように、児倉 (2010, 2013b) は李ほか (1986) でテンスとして記述されている要素のうち、少なくとも *-mi* と *-maɣe=i* についてはテンスとして扱うのが妥当ではないと述べている。ここで問題となるのは李ほか (1986) が記述している他の要素のテンス性、具体的には、過去を表すとされる *-Xe=ŋe* と *bi-Xe* のテンス性である。以下 5 節では、*-Xe=ŋe* と *bi-Xe* の記述を検討し、そして、これらの形式が過去を表すという記述はテンス性という観点では妥当だが、このテンス性は *-Xe=ŋe* や補助動詞 *bi-* が過去というテンスを表すからではなく、*-Xe=ŋe* や補助動詞 *bi-* が表すモダリティの特徴から二次的に生じるものである、と結論付ける。

5. シベ語におけるテンスとモダリティ

本節では、*-Xe=ŋe* と *bi-Xe* の表すモダリティについて論じる。そして、*-Xe=ŋe* と *bi-Xe* が過去の事態を表すという現象が、これらの要素がともに、話し手が既に知っている事柄を表す、というモダリティの特徴を持ち、このことから必然

²¹ 補助動詞 *bi-*, *o-* は非現実の *-mi* と未完了の *-maɣe* をとらず、完了の *-Xe* のみとる。このため、補助動詞 *bi-*, *o-* の機能とその完了形 *biXe*, *oXe* の機能を区別して論じることが困難である。そこで本論では当面補助動詞の完了形 *biXe*, *oXe* の機能を補助動詞 *bi-*, *o-* の機能であると考え、両者の区別を論じることは今後の課題とする。

的に文の表す事態は発話時において既に成立している必要があり、このことから過去性が生じる、と結論付ける。

5.1 モダリティ

2.2 で提示したモダリティの枠組みに従い、児倉 (2013b)では3節で取り上げたシベ語のテンス・アスペクト要素とかかわるモダリティを以下のものであるとした。

表 3. 接語 =i, =ŋe と補助動詞 bi- の表すモダリティ

	接語 =i	接語 =ŋe	接語なし
補助動詞 bi- なし	(a) 知識データベース への情報の書き込み	(b) 知識データベース からの情報の読み出し	(c) 知識データベース の入出力なし
補助動詞 bi- あり	(d) 話し手の 知識データベース への情報の書き込み	(e) 話し手の 知識データベース からの情報の読み出し	(f) 話し手の 知識データベース の入出力なし

ここで、情報の書き込みは (1) で示した齊藤 (2006) の仮定したプロセスに相当し、また、読み出しは同じく齊藤 (2006) の仮定した (1) のプロセスの③に相当する。まず表中 (a) から (c) に相当する、接語が補助動詞 bi- と組み合わせられない場合をみていく。まず接語 =i は知識データベースへの情報の書き込みを表す。接語 =i は単独で用いられる (a) の場合、聞き手の知識データベースへの情報の書き込みという心的プロセスを表し、談話では新情報を表す²²。以下の (8) において、B の応答の文の内容は、A が質問として要求した、A にとっての新情報となっているが、このとき完了形が接語 =i を伴った形式は容認されるのに対し、接語 =ŋe、および接語を伴わない形式は容認されない。

²² 正確には、接語 =i は聞き手がない独り言の状況において話し手が新たに獲得した情報にも使うことが可能であり、この場合を含めると接語 =i は話し手・聞き手を指定しない知識データベースへの情報の書き込みを表す、とすべきである。このとき、談話において話し手、聞き手のどちらにとっての新情報を表すかは話し手・聞き手が当該の情報を持っているか (知っているか)、という語用論要因によって決定され、特に聞き手の知識データベースへの登録は聞き手に対する登録の要求、という発話内行為 (illocutional act) を表し、必ずしも聞き手の知識データベースへの登録が実現するとは限らないと考える。詳しくは児倉 (2013b) を参照されたい。

- (8) A: eneŋe laŋe#eweN gya-Xe=i na.
 今日 ナン 買う-PFV=NINF Q
 <今日ナン買ったか?>
- B: emgeri' [gya-Xe=i /??gya-Xe=ŋe / gya-Xe].
 既に [買う-PFV=NINF / 買う-PFV=OINF / 買う-PFV]
 <もう買ったよ>

次に、接語 =ŋe は既に知識領域に存在する知識を読み出す (活性化する) という心的プロセスを表す。既に 2.2 で見たように、新情報の登録の際には言語主体の心内に存在する関連する知識が照合のために読み出されるが、=ŋe の表す心的プロセスはこれに相当し、談話では新情報ではなく、前提ないし旧情報を表す。上の (8) において B の応答の文は、A が要求している、(B が) ナンを買ったか否か、という情報を直接的に新情報として提供しているが、次の (9) において A が要求している情報はこれからナンを買うか (買う必要があるか) どうかであり、B の応答文の内容「(B が) 既にナンを買った」ではない。しかし、A は B の応答文で提供された情報をもとに、「B が既にナンを買っていれば A はナンを買う必要がない」という推論を行い、A が質問として要求した情報を得ている。(9) の A の最後の発話はこのことを示している。

- (9) A: eneŋe laŋe#eweN gya-mi na.
 今日 ナン 買う-IRR Q
 <今日ナン買うか?>
- B: emgeri' [gya-Xe=ŋe /??gya-Xe=i /??gya-Xe].
 既に [買う-PFV=OINF / 買う-PFV=NINF / 買う-PFV]
 <もう買ったよ>
- A: tutu o-ci da gya=qu o-Xe.
 そのよう AUX-COND すなわち 買う=PFV.NEG AUX-PFV
 <それなら買わない>

接語 =ŋe は知識データベースからの知識の読み出しを表すことから、情報の書き込みを表す =i とは異なり、当該の知識が既に知識データベースに読み出し可能な状態で存在している必要がある、つまり話し手は発話の時点で当該の知識を知っており、かつ覚えている必要がある²³。以下の (10) は -Xe=ŋe が、発話時において話し手が覚えていない情報に対して用いられないことを示してい

²³ ただしこれは平叙文の場合のみであり、疑問文の場合は当てはまらない。

る。

- (10) a. (話し手は先週の月曜にどこに行ったかを尋ねられて答える)

ye#yaN=de [gene-Xe=i / ?gene-Xe=ŋe].
 <病院>=DAT [行く-PFV=NINF / 行く-PFV=OINF]

<病院に行った>

- b. (Bは忘れたので手帳を見て答える)

ye#yaN=de [gene-Xe=i / #gene-Xe=ŋe].
 <病院>=DAT [行く-PFV=NINF / 行く-PFV=OINF]

<病院に行った>

(c)の接語を伴わない形式 (-Xe) は、知識データベースへの入出力を表さず、談話では情報のやり取りに関する機能を持たず、詠嘆などに用いられる。

- (11) teni' mutu-Xe.
 ようやく できる-PFV
 <ようやくできた>

次に、表3の(d)から(f)に相当する、接語 =i, =ŋe が補助動詞 bi- と組み合わせられた形式を見ると、補助動詞 bi- は(d)から(f)で一貫して話し手の知識データベースに対する操作を表すのに対し、補助動詞 bi- の完了形が接語 =i と組み合わせられた形式 bi-Xe=i (d) は話し手の知識データベースへの情報の書き込みという心的プロセスを表し、談話では3.2.2で見た話し手の発見(mirativity)を表す。bi-Xe=i が発見を表すのは、bi-Xe=i が表す話し手の知識データベースへの情報の登録から、当該の情報が話し手の知識データベースには存在しなかったことが推論されるためである²⁴。(e)は話し手の知識データベースからの情報の読み出しという心的プロセスを表す。(b)と同様、話し手の知識データベースに既に存在する知識に用いられるが、特に発話時に導入された(新)情報と話し手の知識データベースに存在する知識が矛盾する場合に用いられる。

- (12) unyu', oi lawdu bause [?seNda-Xe=ŋe / seNda-Xe bi-Xe=ŋe]
 INTJ INTJ 多く 肉まん [置く-PFV=OINF / 置く-PFV ある-PFV=OINF]

²⁴ 分析と議論の詳細は児倉(2013b)を参照されたい。

we je-Ke²⁵ ere.
誰 食べる-PFV これ

<あれー。ああ、たくさん肉まんを置いていたのに、誰が食べたこれ
> (ノダ文調査票 028-20a-10a²⁶)

また、(f) に相当する補助動詞 bi- の完了形単独の形式 bi-Xe は話し手の知識データベースへの操作(書き込みと読み出し)がないことを表す。bi-Xe は平叙文に現れる場合、話し手が確信を持って覚えており、また聞き手も知っていると思定している情報を思い出すよう促す状況で用いられる。児倉(2016)は、補助動詞 bi-Xe とその使用の際に観察される「思い出し」の心的プロセスの関係について論じ、(a) の bi-Xe=i に準じて、bi-Xe は話し手の知識データベースに登録する必要のない情報を表し、(b) 「思い出し」は齊藤(2008)で仮定される情報の心的処理における③の読み出しのプロセスに相当する、としている。このプロセスは、特に以下の例のような疑問文の場合に表される、話し手が当該の情報を思い出せない、という状況で現れる思い出しの思考として顕著に観察される。

(13) bi siN=de ale-Xe bi-Xe.
1SG 2SG=DAT 告げる-PFV AUX-PFV
<私はお前に言ったじゃないか>

(14) tere jaqe ai se-Xe bi-Xe.
あのもの なに 言う-PFV AUX-PFV
<あいつ、何ていったっけ...>

5.2 テンス性とモダリティ

本節では、4節でみた -Xe=ŋe と補助動詞 bi- の過去のテンス性について5.1でみたモダリティから論じる。

5.2.1 -Xe=ŋe

3.1節でみたように、李ほか(1986)は -Xe=ŋe を過去を表す形式他の形式 -Xe=i, -Xe と比較し、-Xe=ŋe が遠い過去を表す、としている。実際、-Xe と -Xe=i は実現した事態であれば眼前(発話現場)で生じた事態にも使えるのに対し、

²⁵ 一部の動詞語幹は完了接辞として -Ke をとる。

²⁶ この例文は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」での共同研究のために角田三枝氏が作成したマンガ調査票(未公開)を使用して調査したものである。

-Xe=ŋe は確かに眼前で生起した事態には使えないことから、-Xe=ŋe にだけは -Xe のテンス・アスペクト的性質からは導かれぬテンス性の制約が存在する。

- (15) a. (話し手と聞き手がバス停でバスを待っていると、遠くからバスが来るのが見えた)

sejeN [ji-Xe=i / ??ji-Xe=ŋe / ji-Xe].
 車 [来る-PFV=NINF / 来る-PFV=OINF / 来る-PFV]
 <バス (lit.車) が来た>

- b. (話し手と聞き手はバス停でバスを待っていたが、聞き手がバス停を離れている間にバスが来て、去ってしまった。話し手は聞き手が戻ってきた後にこのことを聞き手に伝える)

sejeN [yawe-Xe=i / yawe-Xe=ŋe / yawe-Xe].
 車 [去る-PFV=NINF / 去る-PFV=OINF / 去る-PFV]
 <バス (lit.車) は去った>

しかし、(15b) だけに注目すると、文脈から同じ時点に生起したと解釈される事態を表すのに -Xe=i, -Xe=ŋe, -Xe のすべてが可能であるため、-Xe=ŋe と他の形式の差異が遠い過去と近い過去、というテンス性によるとは言えない。これは次の (16) のような、文脈から (15b) よりさらに遠い過去に生起したと解釈される事態についても同様である。

- (16) bi duliNkyani bei#jiŋe=de
 1SG 去年 北京=DAT
 [gene-Xe=i / gene-Xe=ŋe / gene-Xe].
 [行く-PFV=NINF / 行く-PFV=NINF / 行く-PFV]
 <私は去年北京に行った>

このことから、-Xe=ŋe のテンス性の特徴は遠い過去を表す、ではなく、発話現場で生起した事態を表すことができない、というものであると考えられる。さらに本論文では、兎倉 (forthcoming) と同様、-Xe=ŋe のテンス性の特徴は、-Xe=ŋe の表す、話し手の知識データベースからの知識の読み出しというモダリティに起因すると考える。4.1 で述べたように、=ŋe の表す情報の知識データベースの読み出しという操作が成立するためには、当該の知識は発話の時点で知識データベース内に存在する必要がある²⁷。またさらに2節で述べたように、

²⁷ さらに言えば、読み出しが可能で存在する必要がある。このことは作例により、話し手が忘れていた情報について -Xe=ŋe が使われないこと、また思い出せない場合に別

Chafe (1973) によれば、出来事の情報には活性化を受けることが可能になるためには一度不活性の状態になる必要があり、そのためには出来事の認識から一定の時間が経過する必要がある。このことから、 $=\eta e$ の表す読み出し (活性化) の操作を受けることの可能な知識は生起してから一定の時間が経過したものに限定されることになる。つまり、李ほか (1986) が「遠い過去」を表すとした、 $-Xe=\eta e$ が発話時に眼前で生起した事態に使えるというテンス性の特徴は、 $=\eta e$ が表す知識の読み出し、というモダリティから来る二次的なものであり、 $-Xe=\eta e$ 自体が特定のテンスを表しているわけではないといえる²⁸。

5.2.2 bi-Xe

次に、李ほか (1986) において $bi-Xe$ が表すとされている「過去」のテンス性について考える。李ほか (1986) は補助動詞 $bi-$ について、 $bi-Xe=i$, $bi-Xe$ 共に「過去」を表すとしているが、このうち、 $bi-Xe=i$ については既に 4.2.2 において、 $bi-Xe=i$ が発話時に生起した・生起している事態にも使えるためこの観察が不適切であると述べた。しかし、 $bi-Xe$ については、以下の (17), (18) のように、過去に生起した事態を表すことができる一方、発話時に発話現場において生起した事態を表すことができないことから、「過去」を表すという観察は妥当であるようにみえる。

(17) (話し手が部屋のカーテンを開けると、窓の外は雨が降っていた)

*oi, aɣa da-maɣe bi-Xe.
INTJ 雨 降る-IMPFV AUX-PFV

(18) (話し手は目の前の子がシベ語を話せるのに気づいた)

*ere ɣaɣeji siwe' gisuN baɣane-me bi-Xe.
これ 男子 シベ 言語 できる-CVB AUX-PFV

本論文では、 $bi-Xe$ が過去に生起した事態のみを表すというテンス的特徴は、「思い出し」を受ける知識がすでに知識領域に存在することによるものであると考える。4.1 でみたように、 $bi-Xe$ の使用に伴い観察される「思い出し」の心的プロセスは、齊藤 (2006) で仮定されている、照合のための知識の読み出しが顕在化したものであるが、このような読み出しを受けるためには、 $-Xe=\eta e$ の場合と同様、当該の知識が既に知識データベースに存在する必要があるために、

の形式 $biXe$ が用いられることから示される。

²⁸ ちなみに、 $-maɣe=\eta e$ も発話現場で生起した事態には使えない。また、この場合も生起してから知識データベースに取り込まれるため、事態が発生してから一定の時間が経過している必要がある。

「過去」というテンス性と結びつくのだといえる。

6. まとめ

以上、本論文では動詞完了形の一形式 $V-Xe=ne$ と、動詞に補助動詞 $bi-$ ($bi-Xe$) が後続した形式を中心に、これらの形式がもつ過去のテンス性を、これらの要素が表す情報・知識の心的操作との関係から論じた。本論文の結論は以下のようによまとめられる。

- [1] シベ語には、事態の時間的位置による文法的要素の使い分け、つまり、文法的なテンスの対立は存在しない。これまでテンスを表すとされてきた文法的要素のうち、は本来的にはアスペクトないしモダリティを表し、これらの文法的要素が表すとされてきたテンス的特徴はモダリティから二次的に生じるテンス性の制約である。
- [2] 従来現在・未来を表すとされてきた $-mi$ は習慣や属性など非現実の事態を表す。非現実という現実性 (actuality) から未来のテンス性との親和性が高いが、個別具体的な事態でなければ過去・現在・未来いずれと結びついた事態も表しうるため、テンスを表すとは言えない。これに対し、 $-maxe$ と $-Xe$ は現実の (現実に生起した) 事態を表す。現実である、という現実性の特徴から、非未来のテンス性との親和性が高いが、どちらも同じように過去・現在と結びついた事態を表すため、 $-maxe$ と $-Xe$ はテンスによる対立をなさない。
- [3] 過去のテンス性に関わる要素 $V-Xe=ne$ と $V biXe$ はいずれも文の内容が話し手の知識データベースから知識として読み出される、という心的処理を表している。これらの要素に観察される過去のテンス性は、文の内容が知識として読み出されるためには発話の時点で既に当該の知識が話し手の知識データベースに存在する必要がある、という制約から二次的に生じるものである。

本論文の分析をもとにすると、シベ語において動詞接辞や補助動詞は発話時を基準とした事態の時間的位置、という時間ダイクシスではなく、発話時の話し手の心内における情報・知識の心的状態、というモーダルなダイクシスである、といえる。

略号一覧

AUX	auxiliary 補助動詞	GEN	genitive 属格
COND	conditional 条件	IMPFV	imperfective 非完結相
CVB	converb 副動詞	INTJ	interjection 間投詞
DAT	dative 与格	IRR	irrealis 非現実

NEG	negation 否定	SG	singular 単数
NINF	new information 新情報	VOICE	voice ヴォイス
OINF	old information 旧情報	1	first person 1 人称
PFV	perfective 完結相	2	second person 2 人称
Q	question 疑問	3	third person 3 人称

参考文献 (著者名アルファベット順)

- Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. New York: Oxford University Press.
- Chafe, Wallace. (1973) Language and memory. *Language*. 49: 261-281.
- (1986) Evidentiality in English conversation and academic writing. In. Chafe, Wallace, Nichols, Johanna. (eds.) *Evidentiality: the linguistic coding of epistemology*. 261-272. Norwood, New Jersey: Ablex Publishing. Corporation.
- (1987) Cognitive Constraints on Information Flow. In Russell Tomlin (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*, 21-51. Amsterdam: John Benjamins.
- (1994) *Discourse, Consciousness and Time*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 朝克 (2006) 『現代錫伯語口語研究』北京：民族出版社。
- Comrie, Bernard. (1985) *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- DeLancey, Scott. (1997). Mirativity: The grammatical marking of unexpected information. *Linguistic Typology* 1: 33-52.
- (2001) The mirative and evidentiality. *Journal of Pragmatics* 33(3): 369-382.
- Givón, Talmy. (2001) *Syntax: An introduction, Vol.2*. Amsterdam: John Benjamins.
- 李樹蘭・仲謙・王慶豊 (1984) 『錫伯語口語研究』北京：民族出版社。
- 李樹蘭・仲謙 (1986) 『錫伯語簡誌』北京：民族出版社。
- Lambrecht, Knud. (1994) *Information structure and sentence form: topic, focus, and the mental representations of discourse referents*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- 児倉徳和 (2010) 「シベ語の動詞接尾辞-mi, -Xe, mahei について—アスペクトと時間ダイクシスの体系—」, 『東京大学言語学論集』30: 93-113, 東京大学人文社会系研究科・文学部言語学研究室。
- (2013a) 「シベ語の三つの動詞完了形 -Xe, -Xeŋe, -Xe の機能と節の階層: なぜ -Xe のみが連体用法を持つのか?」『北方言語研究』3: 155-174, 北海道大学大学院文学研究科。
- (2013b) 「シベ語のアスペクト・モダリティの研究—知識状態の変化にもとづく体系化—」博士論文, 東京大学。
- (2016) 「シベ語の補助動詞 biXe と「思い出し」」『九州大学言語学論集』36: 129-146, 九州大学文学部言語学研究室。
- (forthcoming) 『錫伯語動詞後綴-Xeŋe の語法機能及其時態, 人称指称上

的表现 (シベ語の動詞接辞 -Xeŋe の文法機能とそのテンス・人称指示への現れ)』

- Kogura, Norikazu. (2015) On the form and function of verbal suffix -mi (-mbi) in Sibe: Is it a vestige of subject agreement?. *Proceedings of the 12th Seoul International Altaic Conference*. 23-34. The Altaic Society of Korea.
- 久保智之, 児倉徳和, 庄声 (2011) 『シベ語の基礎』東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Kubo, Tomoyuki. (2008) A sketch of Sibe phonology. 寺村政男・久保智之・福盛貴弘編『言語の研究—ユーラシア諸言語からの視座—』(『語学研究フォーラム』16), 127-142, 大東文化大学.
- Mathias, Jenny and San San Hnin Tun. (2016) *Burmese: a comprehensive grammar*, New York: Routledge.
- Mithun, Marianne. (1999) *The languages of native North America*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Narrog, Heiko. (2005) On defining modality again. *Language sciences*. 27: 165-192.
 ——— (2012) *Modality, subjectivity, and semantic change: a cross-linguistic perspective*. Oxford : Oxford University Press.
- Palmer, F. R. (1986) *Mood and Modality* (1st ed.) Cambridge; New York: Cambridge University Press.
 ——— (2001) *Mood and Modality* (2nd ed.) Cambridge: Cambridge University Press.
- 定延利之, 田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構— 心的操作標識「ええと」と「あの(一)」—」『言語研究』108: 74-93.
- 齊藤学 (2006) 「自然言語の証拠推量表現と知識管理」博士論文, 九州大学.
- 薩蒙, 伊爾罕芝, 郭向陽, 謝巍 (2011) 『錫伯語通論』烏魯木齊: 新疆人民出版社.
- 田窪行則 (1995) 「音声言語の言語学的モデルをめざして—音声対話管理理論を中心に—」『情報科学』36(11): 1020-1026. 情報処理学会. (田窪 2010: 181-192 に再録)
 ——— (2010) 『日本語の構造: 推論と知識管理』東京: くろしお出版.
- 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3(3): 59-74.
 ——— (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』東京: くろしお出版.
- Takubo, Yukinori and Satoshi, Kinsui. (1997). Discourse management in terms of mental spaces. *Journal of pragmatics*, 28(6): 741-758.
- 富樫純一 (2001) 「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』6: 19-41, 筑波大学文芸・言語研究科.
- 張泰鎬 (2008) 『錫伯語語法研究』昆明: 雲南民族出版社.

Zikmundová, Veronika. (2013) *Spoken Sibe: Morphology of the Inflected Parts of Speech*. Prague: Carolinum Press.

Tense and Modality in Sibe: focusing on the temporality of past

KOGURA, Norikazu

(Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa)

The present article argues for the interaction of modality (or epistemicity) and tense in Sibe by reanalyzing some verbal elements that had formerly been assumed to be markers of tense. In Sibe, it has been observed that *V-Xe=ŋe*, a nominalized past tense verb, denotes remote-past events, and *bi-Xe*, the past tense participle of the auxiliary *bi-*, denotes past events. Although the observation, which is provided by the literature, seems plausible, the whole TAM system in Sibe is not structurally described by assuming that these elements denote (remote) past temporality as the basis for its primary semantics. The present paper argues that the temporality that is observed in the semantics of *V-Xe=ŋe* and *bi-Xe* is not based on its primary semantic system but on a secondary one that arises from the modality of these elements: both *V-Xe=ŋe* and *bi-Xe* denote the (re-)activation of knowledge in the (long-term) memory of the speaker. The knowledge that receives activation is always in an inactive state in memory, and it takes some time for the newly-obtained knowledge to become inactive.